



東京部会(第103回)

日時: 2018年10月25日(木) 19:00-21:30

場所: 慶応義塾大学三田キャンパス研究棟 446号会議室

参加者: [順不同・敬称略] 篠原総一(京都学園大学)、加藤一誠(慶応義塾大学)、鈴木深(東京証券取引所)、岡部ちはる(東京証券取引所)、中山諒一郎(流通経済大柏高)、杉田孝之(千葉県立津田沼高校)、岸香おり(ICU高校)、藤巻朗(目黒学院中・高)、埴枝里子(都立府中東高校)、杉浦光紀(都立井草高校)、金子幹夫(神奈川県立三浦初声高校)、中沖栄(清水書院)、新井明(上智大学非常勤講師)、中村知誠(慶応義塾大学)以上14名。

1 報告事項・事務連絡

(1) 先月の実践報告に関するコメントがあった。

- ・報告事項の前に、9月の東京部会で報告された岸先生の「軽減税率」に関する授業プランに関して篠原代表から以下のようなコメントがあった。
- ・軽減税率問題は現在の政策課題について考える極めてよいテーマである。

ただし、それをラムゼールルールのような高度な経済理論モデルの学習に誘導するよりも、軽減税率の導入が消費者や企業、さらには社会の資源配分にどのような影響を与えるか、といった幅広い角度から生徒にグループで調べさせることを勧める。そこから討論し、課題の発見と解決策の摸索に向かわせるグループ学習授業の方が、生徒が社会のことを考えるという優れた学習になるからである。

(2) 「冬の経済教室」in 沖縄の概略が報告された。

- ・19年1月5日開催、講師は樋口雅夫先生(玉川大学)、奥田修一郎先生(大阪教育大学)、篠原総一代表の各先生方。

(3) 「冬の経済教室」in 札幌の概略が報告された。

- ・19年1月26日開催、講師は鍋島史一氏(教育実践研究オフィスF代表)、奥田修一郎先生のお二人と新井が担当することで了解された。

(4) 「春の経済教室」in 東京の概略が報告された。

- ・19年3月16日開催、テーマは「行動経済学を授業に活かす」。問題提起者は安藤至大先生(日本大学)、授業提案は、河原和之先生(立命館大学他)、杉浦光紀先生(都立井草高校)、大塚雅之先生(府立三国丘高校)が担当することで了承された。

(5) 北見でのWSの報告が行われた。

- ・新井から、全体の概要と授業での様子、授業見学をされた杉田先生のコメントなどが紹介された。記録は、ネットワークHPに掲載の予定である。

2 実践報告と検討

(1) 大阪の大塚雅之先生の授業案が紹介された。

- ・大阪部会で提案された大塚先生の授業案「交換と分業、起業と金融」の融合授業の改定版と東京部会有志の研究会での検討内容が紹介された。高校1年生の6時間を使った授業プランで、2年次の「社会的起業をとおして持続可能な社会づくりに貢献する人を育てる」取組みのための準備授業という位置づけのものである。
- ・交換ゲームからはじまり、産業構造の変化のなかの働き方を考えさせ、そのうえで社会に必要な起業を構想させるという流れである。起業したプランに関して、企業はどのように資金調達するのか、投資家は、期待値やリス



クを計算しながら投資先を決定するという、新学習指導要領の方向性に即した活動を行う学習プランである。

- 全体のつなぎ、起業したプランの可能性、投資する側の様々な要因を行動経済学の知見をいれて整理して再構成することで、これまでの起業家教育にない授業プランとなる可能性があるのではということになった。

(2) 杉浦光紀先生の「モラル・エコノミーと行動経済学」の報告があった。

- これは、9月の東京部会で提案された授業案「経済人とモラルー子どもお手伝いから政策立案まで」の改定版である。
- 高等学校2年生「倫理」での実践プランである。最後通牒ゲームを冒頭に行わせ、人間の利己性と利他性に気づかせ、その知見を活かして、思想家(今回はスミス)の原典を読ませ、キー概念(インセンティブ)を抽出させる。そのうえで日常生活のなかでの問題解決の方法を提案させるという流れの授業である。
- 行動経済学の知見の組み込ませ方、資料として提示した『ヘンテコノミクス』のまんがの事例の適否、スミスの原典の読ませ方などが議論となったが、意欲的な授業プランであり、さらに内容の検討を続けることになった。

(3) 篠原代表から、行動経済学と伝統的新古典派経済学の違いについて、簡略なコメントがあった。

- 伝統的な経済学理論は、複雑な経済、社会現象を理解するうえで、さまざまな要因の中から、その時に取り上げる現象を引き起こす核心的な要因だけを取り上げ、その他の要因は無視するか変化しないという前提条件をおく。だから、例えば需要や供給は価格に依存し、需要と供給が一致するように価格が決まる、などと教える。そして、そのようなパーツを積み上げて、経済全体の活動の動きを説明しようとする。

これに対して行動経済学は、様々な極端な前提条件を置くことなく、人々が実際に行動する様を(実験や観察を通して)捉えようとする。

だから、恐らく、生徒が社会のことを学ぶという意味では、行動経済学の知見を活かした経済教育の方が、教科書の裏で使われている新古典派経済学に頼る経済教育よりも、生徒には分かりやすいのではないかと思われる。

ただし、行動経済学は、現在も研究発展途上にあり、経済全体を鳥瞰する枠組みは持ち合わせていないので教育面でも、特定の市場や取引に関する理解という狭い範囲に限定されるきらいがある。

3 その他の連絡

(1) 来夏の「夏休み経済教室」の日程の検討が始まった。

- 来夏の「夏休み経済教室」の日程が、会場の関係で何点か提示され、至急日程を決めてゆくことになった。

(2) 東証の新しい教材作成の途中経過が紹介された。

- 今夏の「夏休み経済教室」で一部が紹介された「会社を知ろう!」「会社を応援しよう!」の現在までの作成状況が紹介された。
- これは、動画を見ながら企業を知り、株式会社の仕組みと資金の調達の学習の導入に使えるように作成した教材である。来年には試行授業を行い3月までには完成して、全国での利用を目指しているとのことである。

4 今回の部会

- 今回も、授業実践の検討を中心に部会を持つことができた。特に、大阪部会での実践報告の紹介や東京部会有志による勉強会での検討を通しての授業提案など、横と縦のつながりができはじめていることが伺える部会となった。(文責:新井)



次回の開催予定、11月22日(木)19:00～21:00、会場は慶応義塾大学三田キャンパス内会議室。
以降、12月25日(火)17:00～19:00を予定している。